さきがけ　令和7月1月13日
け　（第3種郵便物認可）

県障害芸術福祉展で最高賞を受賞した「花曼陀羅」などが並ぶ作品展

題材多彩 切り絵緻密に

左半身まひ 佐々木さん

地元大曲、17日まで作品展

脳梗塞の後遺症で左半身にまひがある佐々木良雄さん(78)＝大仙市大曲丸子町＝が制作した切り絵の作品展「佐々木良雄の切り絵『腕一本』」が、同市和合のイオンモール大曲1階大仙市民ギャラリーで開かれている。花々やチョウなど多彩なモチーフを緻密に表現した25点を展示している。17日まで。

佐々木さんは15年ほど前に脳梗塞で倒れ、左半身のまひと左脚にしびれが残った。当初はリハビリとして始めた切り絵に熱中し、以来、通所している施設「リハビリデイもみじの家」で日々作品作りに励んでいる。県障害芸術福祉展で最高賞を3度受賞し、県内各地で作品展を開いている。

「もみじの家」職員の送迎で会場を訪れた佐々木さん（本人提供）

会場には、花を題材に幾何学的な図柄を表した1・2㍍四方の大作「花曼陀羅（まんだら）」をはじめ、切り絵を始めた当初までさかのぼりえりすぐりの作品を並べた。「子どもに楽しんでほしい」という思いで作り始めた「日本の蝶（ちょう）」は、色とりどりの75種類のチョウを描いた。約20種類のデザインナイフとカッターを使い分け、図鑑を見ながら、羽の形や模様を繊細に表現したという。

「晩秋」と題した作品は、見頃を終え枯れかけたヒマワリの花を、間近から迫力を感じさせる構図で写した。水溶性色鉛筆で、植物の深みがある色合いと陰影を出している。ほかにも、今年の干支（えと）にちなんだヘビやこま、梅の花をメルヘンチックに表現した新年を感じさせる作品や、ネイルアート用のラメを用いて打ち上げ花火のきらめきを再現した作品などが並ぶ。

左手が使えないため、文鎮で紙を押さえて慎重に模様を切り取る。「一度失敗したらやり直しなので、集中して作業する。その間は脚のしびれを忘れられる」と佐々木さん。作品展は、もみじの家の職員たちが調整役を担い、開催にこぎ着けたという。「職員の皆さんや、作品の完成を楽しみに待ってくれている人たちのおかげで制作を続けられている。作品を通じて感謝を伝えたい」と話す。

午前10時～午後9時。無料。（針金友理子）